

【選択】なぜ古典を教えるのか

- ◆期日 平成31年8月5日(月)～8月7日(水)
- ◆主な対象 中学校・高等学校国語科教諭
- ◆定員 40名
- ◆会場 渋谷キャンパス
- ◆応募期間(仮申込) 平成31年4月16日(火)10:00～4月19日(金)23:59
- ◆受講料 2万円
- ◆時間数 18時間 【選択領域】受講者が任意に選択して受講する領域
- ◆講習内容

どうして古文をやるの?—生徒にそう聞かれたらどうお答えになりますか。

当講習では、本学で、日本古典文学、国語学、民俗学、国語教育学等の研究・教育に携わる講師陣が、具体的な資料を紹介しつつ、それぞれの立場から古典の持つ意義について論じます(講座によっては演習形式を取る場合もあります)。そのうえで、受講者の皆さんには、実践家の立場から中学校・高等学校の国語科における古典教育の意義について考えていただきます。

◆担当講師

- 土佐 秀里 國學院大學文学部教授
- 野中 哲照 國學院大學文学部教授
- 中村 正明 國學院大學文学部准教授
- 石川 則夫 國學院大學文学部教授
- 長谷川 清貴 國學院大學文学部准教授
- 小田 勝 國學院大學文学部教授
- 服部 比呂美 國學院大學文学部准教授
- 杉山 英昭 元國學院大學大学院客員教授
- 林 利久 國學院大學文学部兼任講師
- 豊島 秀範 國學院大學文学部名誉教授
- 高橋 大助 國學院大學文学部教授

◆シラバス

講義名	万葉集「子等を思ふ歌」を読む
担当講師	土佐 秀里
講義概要	<p>高等学校の一部教科書で教材にも採られている山上憶良の「子等を思ふ歌」を例にして、万葉集の読み方を考える。</p> <p>まず、先入観を排して言葉そのものに向かうこと。この歌の特色は、漢文序と歌がセットになっていることにある。そのどちらが欠けても作品としては完結しない。漢文序と歌とを同等のものとして見る視点が必要である。</p> <p>その漢文序には仏教の知識が反映しているが、その「知識」が本当に正確なものなのかどうか、確認する必要がある。また歌の表現も、先入観で判断せず、用例に即して読解しなければならない。</p> <p>あわせて憶良その人の人生にも触れておきたい。そこからは意外な一面も見えてくることになる。また、万葉集においては、児童を歌の対象にすることは少なく、あつたとしても、性愛の対象として見るという反社会的な捉え方であったりするのだが、憶</p>

	<p>良ひとりだけは、親の視点から「子どもが可愛い」という主題を歌っている。その特異性を踏まえた上で、憶良が児童・幼児を歌う意味について考えてみることにしたい。</p> <p>万葉集が教材として採り上げられる比重は小さいが、日本古典の基礎となる重要な作品であり、それについて理解を深めることは、古典教育・国語教育をより確かなものとしていくためにも必要なことであろう。形式的なものになりがちな和歌単元や古典教育を、いかにして力のある「ことば」の教育にしてゆくかが問われることになろう。本講がその探求の一助となれば幸いである。</p>
評価方法	講義終了後に、課題を提示し、短いレポートを作成する。古典文学作品に対する理解がどの程度あるかという観点と、それを教授する立場であることの自覚という観点から評価する。

講義名	『平家物語』で身につける想像力
担当講師	野中 哲照
講義概要	<p>「なぜ古典を教えるのか」という問いにたいする答えの一つに、「古典の中に人間の普遍的な姿を学ぶうからだ」という言い方があります。時代を超えて生き残った古典には、いつの時代の人々にも訴えかけるものがあるということでしょう。</p> <p>それにしても、物語が伝えようとしている意味を正確に読み解くことができなければ、古典を学ぶ意義も半減してしまいます。「現代語訳はできたのだけれど、作品世界が深く理解できたとは言えない」という状況が、それです。『平家物語』などの軍記物は、現代人が思う以上に、読者の想像力を要求している物語です。われわれは、心してかからなければ、その作品世界に入ってゆけないのです。</p> <p>この講義では、『平家物語』などの軍記物で、緻密な豊かな想像力を鍛えます。その力が身に付けば、古典の授業が退屈なものから面白いものへと変身するはずです。</p>
評価方法	講義にもとづく筆記試験による

講義名	『おくのほそ道』と古典解釈の視点
担当講師	中村 正明
講義概要	<p>松尾芭蕉の紀行文『おくのほそ道』は、現在でも多くの人々に読み継がれている国民文学ともいべき古典であるが、いまなお多くの問題点を抱えている。その多くは本文や発句の解釈に関する問題点であるが、それらはすでに江戸時代からさまざまな解釈が成されてきたものである。更に、近年の『曾良旅日記』と芭蕉自筆本『おくのほそ道』の発見により、また新たな解釈が提示されるようになった。本講義では、そうした近年の新資料発見によって、作品解釈がいかに多様化したかを紹介していく。そして、そこから見えてくる「古典文学作品を解釈するための視点」や「解釈の方法」について、問題提起していくことにする。</p>
評価方法	講義にもとづく筆記試験による

講義名	なぜ「舞姫」を読むのか
担当講師	石川 則夫
講義概要	<p>森鷗外「舞姫」は現代文の定番教材として長く採用されてきたが、その文体はほとんど古典教材と言ってもよいほどの難しさがある。これを現代文教材として扱うことに躊躇</p>

	<p>躊躇する教員が多いのも当然ではあろう。したがって、現代語訳のテキストを使用して授業を行っているということも珍しい話ではない。また、「舞姫」のストーリーにしても、エリート官僚への道を突き進んでいた太田豊太郎が、自らの主体的な生き方に目覚め、立身出世の道を外れていくことも意に介さず、薄幸の美少女エリスとのロマンスを謳歌するが、再び官僚への道へ舞い戻ってしまう。つまりは出世のためにエリスを捨てて顧みない男として読まれるために、その節操のない行動は批判的ともなってしまう。つまり、高校生においてはすこぶる評判の悪い男性像を教えなければならないことにもなっており、その内容からも敬遠されがちな教材なのかもしれない。</p> <p>しかし、ではなぜ「舞姫」は日本近代文学史の最初期にいつも言及される作品なのだろうか。また、確かに文章は古く、明治の古典として位置づけられるところもあるが、この作品を古典として遠ざけてしまってよいのだろうか。</p> <p>この講義では、「舞姫」の新しさを掘り起こし、現代文としてこれを読まねばならない価値について考察してみたい。</p>
評価方法	<p>講義の最後の10分程度の時間で400字ほどのレポートを記述していただきます。テーマは講義の最初にお話しします。また、森鷗外「舞姫」を読んでおいていただきます。文庫版の本文で結構です。</p>

講義名	『論語』の考え方——「温故而知新」章を例に
担当講師	長谷川 清貴
講義概要	<p>現代において、古典、中でも漢文は疎遠の度合を増しています。漢文を学習するうえで、「なぜ中国の古い作品を読まなければならないのか？」という疑問は、通り一遍の解答は提示できても、なおその意義を考えなければならない根本的な問題であると思われます。</p> <p>高校「古典（漢文）」のほとんどの教科書では、思想文献として『論語』が掲載されています。教材での『論語』は、学問、政治、徳目などのテーマを設定し、関連する章をいくつか掲げるものが多いようです。</p> <p>『論語』各章の内容は、短いなかにも力強い主張があり、時代や文化を超越した普遍性をもつものが多いため、教材として数章を取り上げ、個別に読解したうえで総合するという方法でも一定の学習成果は期待できます。しかし、『論語』には五百もの章があります。そのなかの数章のみを読んだだけで、的確な捉え方ができるのか。また、単に字面だけを追った理解に終わってしまわないか。各章が簡明で言葉を贅しないぶん、多様な解釈が生まれうるのが、『論語』というテキストです。</p> <p>本授業では、『論語』中最も有名な章のひとつである「子曰、温故而知新、可以為師矣」章（為政第二）を例に、主要な注釈や関連する記述を示しながら内容を検討し、『論語』への向き合い方を考えます。</p>
評価方法	<p>授業の最後に、授業内容の要約と、内容に関する見解を答える試験を出題し、その内容によって評価します。</p>

講義名	古典文法教科書の記述を検討する
担当講師	小田 勝
講義概要	<p>高校生向け古典文法教科書（副読本）の文法用語・文法説明には、教科書によって色々</p>

	とゆれがみられます。活用表の語幹の書き方、形容詞の仮定条件形、希望・願望の使い分け、などです。この講義では、古典文法教科書にどのようなゆれがあるのかを確認し、その上で、どのような文法用語・文法説明が、古典文法教育では適切であるか考えます。合わせて、古典文法の学習参考書の記述の問題点も取り上げます。
評価方法	講義にもとづく筆記試験による。

講義名	「伝承文学」という視点—古典と口承文芸—
担当講師	服部 比呂美
講義概要	<p>文学の伝承方法には、書承と口承という二つの方法があり、それらは互いに影響をあいながら人びとに受け継がれてきた。</p> <p>平成 31 年度の講習では古典の中の口承の物語に焦点をあてることにする。具体的には「古事記」にある三輪山伝説、「平家物語」巻第八「緒環」と、昔話として伝承されている「蛇簪入」を取り上げ、口承の物語が歴史過程で文字化されている姿を講じていく。「古事記」の三輪山伝説や「平家物語」の「緒環」は、いずれも始祖伝説といえる物語で、人物の特異性を語るときに異類婚姻譚が使われているのである。こうした異類の子孫の描き方と、老人が子どもたちにイロリ端などで語って聴かせた「昔話」としての蛇簪入の物語とを比較することによって、文字テキスト化された物語と口承の物語がどのように違うのかなどを捉えていく。</p> <p>「浦島太郎」「一寸法師」や「桃太郎」など、中学生や高校生の多くが子どもの頃に親しんだ絵本にも口承の物語が取り込まれている。こうした視点を授業などに取り込むことによって、国語教育に広がりを与えることができよう。</p>
評価方法	小レポートの点数による。

講義名	学習材としての開発教材への構想
担当講師	杉山 英昭
講義概要	<p>古来から、「かぐや姫の物語」とか「竹取物語」とか呼称された初期物語から、現在の我が国の古典文学の学習は開始され親しまれている。仏典や漢籍などの古代説話や、内外の諸伝承にもその淵源を見るこの物語は、そのスケールの大きさから古典文学学習の劈頭を飾るにふさわしい教材だと評することができる。「竹取物語」の教材化の歴史は古いが、現代においてはどのような文学作品が学習材としてふさわしいかという問題は、古典文学研究の進展と現代という時代への認識とによって考究されなくてはならない。ここでは古典文学の教材化の視点から、古筆を含めた教材原本や古典や近代の絵画資料など、教材のビジュアル化の問題をも含めて、新学習指導要領改訂を視野に入れて、学習材としての古典文学教材を構想してみたい。</p>
評価方法	小論文叙述による評価。二つの問題のうち、一問題を選んで論述する。

講義名	古典籍を用いた教材作成と 「学びへの誘い」
担当講師	林 利久
講義概要	<p>古典文学を学ぶには、原文を読む力が重要です。しかし、古典文学の中で描き出される日本の文化は、現代の社会と余りにも掛け離れていて、学ぶ者には大きな違和感を与えているのではないのでしょうか。</p>

	<p>ビジュアル資料を用いて古典文学を考えることは様々なところで語られていますが、日常の中からでもほんの小さな事実の発見から違和感を感じ取り、調べて見る機会を与えることができると思います。 國學院大學図書館所蔵のデジタルライブラリーなどから、古典籍「月々のあそび」、「竹取物語絵巻」、「伊勢物語絵巻」、「伊勢物語 (奈良絵本)」、「義経奥州落絵詞 (絵巻)」等の資料を用いて映像資料を作成し、古典文学や日本の文化についての授業に活用できる資料作成について考えてみます。古典資料と現代の活字資料を融合することで、生徒たちに古典文学や日本の文化についての新たな興味を引き出す機会と方法を考えてみます。また、ネット上に散見できるサイト等を紹介し、授業への活用を紹介します。</p>
評価方法	

講義名	『源氏物語』の成立と書承の実態
担当講師	豊島 秀範
講義概要	<p>どうして〈古文〉を学ぶのか。それは、今の我々が読んでいる〈小説〉や〈劇画〉などのように、人々の関心の高い、当時の〈現代の物語〉であったからです。そうした実態について、『源氏物語』を中心に、『紫式部日記』や『狭衣物語』などを取り上げて、以下順序で考えてみます。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 『源氏物語』が世に広まる情況 2. 書写することと、物語の改作 3. 和歌を書き加える『狭衣物語』 4. 〈読み聞かせ〉が当時の読書方法 <p>以上について、具体的な資料に即して、一緒に考えてみたいと思います。</p>
評価方法	講義にもとづく筆記試験による